東海大学大学院文学研究科文明研究専攻・東海大学文明学会共催

# 2021 年度
# 文明学会研究大会
# ・
# 大学院修士論文中間発表会

# 要旨集

日時：2021 年 10 月 2 日（土）９時 45 分～15 時１０分

開催方法：Zoom ミーティングによるオンライン開催

トピック: 2021 年度大学院修士論文中間発表会・文明学会研究大会
時間: 2021 年 10 月 2 日 9:45 AM 大阪、札幌、東京

# プログラム

9:45　開会の辞（会長挨拶）　会長：春田晴郎

9:50　総会報告

【文明学会一般発表】　司会：吉田晃章

10:00～10:30　久我陽「楔形文字の字形変化に関する予測研究―問題点と今後の課題―」

10:30～11:00　吉岡泰子「レオナール・フジタ「平和の聖母礼拝堂」
－国際的画家の創った礼拝堂とその背景－」

11:00～11:30　二重作昌満「発信媒体の拡大に伴う特撮ツーリズムの変化と展望」

11:30～12:00　森園奈央「民族観光の変化とこれから」

12:00～12:30　安達未菜「フェリブリージュ・ルージュ創設過程に関する一考察」（仮）

〔昼休憩〕

【修士論文中間発表会】（ ）は指導教員名

13:30～14:00　井上岳人「博物館における効果的な障害者支援について
―包摂する博物館―」（吉田欣吾先生）

14:00～14:30　小能治子「古代エジプトにおけるアイラインの長さと宗教儀礼について
―古王国時代から中王国時代まで―」（山花京子先生）

14:30～15:00　宍倉和弥「モバイルミュージアム理論を用いた次世代の博物館経営論」
（吉田欣吾先生）

15:10　閉会の辞

以上

# 目次

【文明学会一般発表】

1）久我　陽　「楔形文字の変化に関する研究計画」（仮）　・・・・・・・・・・・・1

2）吉岡 泰子　「レオナール・フジタ「平和の聖母礼拝堂」
ー日系フランス人画家の創った礼拝堂とその背景ー」・・・・・・・・・・2

3）二重作昌満「発信媒体の拡大に伴う特撮ツーリズムの変化と展望」　・・・・・・・3

4）森園　奈央「民族観光の変化とこれから」　・・・・・・・・・・・・・4

5）安達　未菜「フェリブリージュ・ルージュ創設過程に関する一考察」（仮）　・・・5

【修士論文中間発表会】

6）井上　岳人「博物館における効果的な障害者支援について
―包摂する博物館―」　・・・・・・・・・・・・6

7）小能　治子「古代エジプトにおけるアイラインの長さと宗教儀礼について
―古王国時代から中王国時代まで―」　・・・・・・・・・・・・7

8）宍倉　和弥「モバイルミュージアム理論を用いた次世代の博物館経営論」・・・・・8

# 楔形文字の字形変化に関する予測研究―問題点と今後の課題―

**久我　陽**
（東海大学大学院文学研究科文明研究専攻博士課程前期）

楔形文字は一般に知られている通り、主にメソポタミア地域を中心としてオリエント全域で広く使われた文字体系である。ウルク古拙文字とよばれるピクトグラム（絵文字）を起源に持つといわれ、表意文字と表音文字、両者の特性を併せ持つ表語文字の一種として、紀元前 3400 年～3300 年代成立した。初期のころは焼いた粘土板に描いていたとされるが、ある時期を境に、葦の茎などを使って粘土板に刻むようになっていく。この際の形状がその形状がくさびに似ることから、楔形文字の名で呼ばれる。メソポタミア地方に留まらず、ペルシア高原やアナトリア半島、エジプトからも出土が確認されている。アマルナ時代の、エジプト＝オリエント社会間のやりとりを記したアマルナ文書もまたその一つであり、楔形文字がメソポタミアの文化としてだけでなく、国際的な共通の文字としても扱われたことがうかがえる。

ところが楔形文字は、甲骨文字から始まる漢字系の文字や、ヒエログリフから来るアルファベットの系譜とは違い、現在、日常的にそれを用いて筆記を行っている人物が、一般的には存在しない。

筆者は卒業論文制作に際して、楔形文字が現代まで続いていたのならば、どのような形になるのか、という予想を立て、まとめた。しかしこの際、根拠として用いた資料が僅かで、完成した予想図は、妄想の域を出ることができない、不完全なものとなってしまった。そのため、修士論文では複数の土地の粘土板の比較から、より一般化した字形変化の法則を見つけ出したいと考えている。

今回、その卒業論文の内容のまとめと課題点、加えて今後修士論文でどのような研究を行っていきたいかの計画を纏めた。

# レオナール・フジタ「平和の聖母礼拝堂」
## －国際的画家の創った礼拝堂とその背景－

**吉岡　泰子**
（東海大学大学院文学研究科文明研究専攻）

画家レオナール・フジタ（藤田嗣治 1886-1968）は、1955 年、フランスに帰化、1959 年、カトリックに改宗し、1966 年、画業の集大成となる「平和の聖母礼拝堂」をランスに建立した。第二次大戦後のフランスでは、アンリ・マティスが建設した「ロザリオ礼拝堂」（1951 年）のような、モダニスムの芸術家による聖堂建設がブームだったが、フジタはそうした近代的なデザインの聖堂に背を向け、中世に回帰するような古風な礼拝堂を建てたのはなぜなのか、注目される。

先行研究では、礼拝堂のネオ・ロマネスク様式の外観については論じられたが、堂内への中世美術の影響に関する言及は少ない。そこで、発表者は、聖具室扉板絵やステンドグラスに、「藤田嗣治旧蔵書」の中世キリスト教美術関連本の図像が多数参照されていることを突き止め、別稿で論じた。その後、礼拝堂全体のコンセプト、フレスコ壁画やステンドグラスの技法も中世美術に依拠していることが明らかになった。

フジタの中世回帰の背景には、画家パブロ・ピカソらのロマネスク美術への注目、1930 年代以降の美術史家によるロマネスク研究、そして、ロマネスクの美を大衆に広めた「ゾディアック叢書」の刊行（1954 年）があると考えられる。友人の画家、田淵安一（1921-2009）も、大きな役割を果たした。西欧の中世宗教美術に詳しかった田淵が、フジタから依頼を受け礼拝堂建設に協力した様子も明らかになった。さらに、当時の日本でも、美術史家や写真家の関連出版物の刊行が盛んになり、ロマネスク美術への関心が広がりつつあった。

このような状況の中で、フジタは 1920 年代から宗教画を描き、1950 年以降も古寺巡礼をし、関連書籍を収集、中世美術に並々ならぬ関心を寄せ、多くの宗教画を描いた。そして、礼拝堂の建設に至ったのである。

最後に、20 世紀の著名な国際画家として活躍したレオナール・フジタの晩年の心境に思いをはせ、画業の集大成として中世キリスト教美術に回帰する礼拝堂を建てた意図に迫る。

【平和の聖母礼拝堂】ランス、フランス　発表者撮影　2017.7.30

# 発信媒体の拡大に伴う特撮ツーリズムの変化と展望

**二重作 昌満**
（東海大学大学院文学研究科研究生）

我が国では、各映像製作会社が制作したアニメや特撮作品を誘致資源とした観光現象を多数確認することが出来る。例えば、アニメ作品を誘致資源とした観光現象は「アニメツーリズム」と呼称され、観光者が作品の舞台となった市町村を訪れる観光現象である。対して、特撮作品を誘致資源とした「特撮ツーリズム」は、着ぐるみやミニチュア等の物品を活用して催事や地域振興等を行なう観光現象である。しかし近年、特撮作品はアニメあるいは漫画作品として発信される機会が急増しつつある。例えば、東宝製作のアニメ作品『ゴジラ S.P（2021）』や、米国の MARVEL COMICS 社による漫画作品『THE RISE OF ULTRAMAN（2020）』等が該当する。筆者がこれまで提唱してきた特撮ツーリズムも、上述した特撮作品がアニメや漫画へと作品の振り幅が急拡大したのを機に、新たな変化が見出されるようになった。

例えば円谷プロ制作の『ウルトラマン（1966）』シリーズに着目すると、米国の NET FLIX 社による 3D アニメ作品『ULTRAMAN（2019）』を題材に、原画等を使用した展覧会や出演声優のトークショー等が多数開催されてきた。また大型商業施設「ダイバーシティ東京」内にて導入された体験型アトラクション『かいじゅうのすみか VR アドベンチャー（2020）』では、VR ゴーグルの中にフル CG で表現された怪獣達が誘致資源として機能しており、これまで撮影で使用された着ぐるみ等の物品が誘致資源であった従来の特撮ツーリズムとは異なる性質を有していた。

つまり特撮ツーリズムは元々「特撮」という一映像ジャンルが起点であったが、アニメツーリズムと酷似した性質の他、物品を使用しないアトラクションの導入等、その開催形態も近年大きな広がりを確認することができる。本研究では、上述した特撮ツーリズムの変化に焦点を当て、従来のアニメツーリズム等と比較してどのような特異な点が見出せるのか、またこれまで提唱してきた特撮ツーリズムと比較した固有の特徴について明らかにする。

# 民族観光の変化とこれから

**森園 奈央**
（東海大学観光学部観光学科非常勤講師）

本来民族観光は、ホストとゲストが出会い、互いにそれぞれの世界観に対する理解を深め合う場となるべきものである。しかし、「風変りなものをみたい」というゲスト（観光客）の欲望は、結果として、対象である民族、すなわちホストの文化だけでなく、個々人の生活やアイデンティティまでも歪曲させるという問題を、多くの国や地域で生じさせてきた。

一方、2019 年末に始まった新型コロナウィルスの世界的な蔓延は、2020 年の国際観光客数を約 3 億 9000 万人に留め、対前年比で 73%も減少させた[1]。民族観光は、事実上外国人観光客に依存しているため、これに係る多くの施設や観光村は、閉園や廃村化などの危機に見舞われ、1 年以上にもわたって、ほぼ停止した状況にある。しかしこの一見不幸な出来事も、人々の行動や価値観に変化を及ぼしつつあり、民族観光の意義を捉え直し、新たなあり方を模索させる兆しを見せている。

コロナ禍におけるオンライン観光の活性化は、ヴァーチャルな時空間の中であるにせよ、ホストとゲストの個別的なやり取りを可能にし、皮肉なことに、観光客はこれまで以上にリアルな体験を容易にすることができるようになった。さらには、観光客が激減したことによって、観光地の環境が回復するなどのメリットが世界中で報告され、ややもすれば生態系を破壊しかねなかった、従来の観光に対する懐疑的な見方も、より一層強くなりつつある。このような世界的な状況は、観光客の志向や行動を変え、ホストの観光客への民族文化の見せ方を変えることができる好機とも言える。

ホストとゲストが互いに学び合い、異文化の豊かさを享受できる観光を推進することは、民族観光の新たな魅力を拓くことになると考える。そのためには、ホスト自身が自民族のアイデンティティに目覚め、自らの文化や自然観を、ゲストに「正当に」見てもらえるよう働きかけることが重要となり、ゲストもそれを「正当に」理解することが必要となる。

人間と自然の関係や世界に関する認識は、民族や文化によって異なる豊かなものであることを、民族観光は学ばせてくれる。言い換えれば、このような多様性を、人々が観光を通じて学ぶことは、豊かさや成功は多元的であるということへの気づきを生むことに繋がる。近年、深刻化する地球と人類の危機的状況に対応すべく、SDGs への取組みが叫ばれるなど、新たな価値観と行動が求められてきている。この傾向は、今後ますます強くなっていくであろう。民族観光は、それに対応できる心構えを養う可能性をもっている。観光が再び活性化した時に、民族観光が本来のもつべき、多様性を照らし出す光を取り戻すことを期待したい。

---

[1] UNWTO, *International tourism and COVID-19* (2021),
from https://www.unwto.org/international-tourism-and-covid-19, retrieved September 22, 2021.

# フェリブリージュ・ルージュ創設過程に関する一考察（１）

**安達 未菜**
（東海大学文化社会学部ヨーロッパ・アメリカ学科非常勤講師）

19 世紀以降、フランスは中央集権体制のもとで国民統合を推し進めるが、他方で地域の側では、それぞれ固有の文化・言語をアイデンティティとする人々による地域復興運動が展開された。その運動の一つにプロヴァンスの団体「フェリブリージュ」（Félibrige）がある。

フェリブリージュは、1854 年、第二帝政期に創設され、プロヴァンス語による文芸活動を行った。執筆された文学作品の中には、1904 年にノーベル文学賞を受賞した長編叙事詩『ミレイオ』（*Mireio*）がある。このことからも明らかなように、この団体はプロヴァンス語とその文芸の興隆に尽力したが、実際には、その文化を基盤とする社会を復興させることが目的にあったと考えられる。しかし、1876 年に、フェリブリージュは不本意に分離主義団体として危険視され、団体存続が危ぶまれるようになると、止む無く公式な政治的・宗教的発言をすることを禁止する。この団体の方向転換に対して異を唱え、分派団体を設立した人物がグザヴィエ・ドゥ・リカール（Louis Xavier de Ricard,1843-1911, Majoral:1888-1911,）とオーギュスト・フーレス（Auguste Fourès, 1848-1891, Majoral:1881-）である。とくに団体設立を推進したのはリカールであったが、実は、彼はもともとパリ出身でフェリブリージュ会員になるのは 1874 年であった。そのわずか４年後の 1878 年、彼は分派団体「フェリブリージュ・ルージュ」（Félibrige Rouge）を新たに設立した。

本報告では、新たな分派団体「フェリブリージュ・ルージュ」（Félibrige Rouge）について、その創設者に焦点を当てて検討する。さらに、そこから当時のフェリーブルと彼らの交友関係のなかに見出される「ラテン」（latin）の考え–ラテンを基盤とする言語、民族連帯意識–についても考察を試みる。このことは、当時のフランス・ナショナリズムに対するプロヴァンスのローカルな文化社会共同体による地域運動の一断面を明らかにすると考える。

# 博物館における効果的な障害者支援について
## ―包摂する博物館―

井上岳人
（東海大学大学院文学研究科文明研究専攻博士課程前期）

### 修士論文中間報告

現在制作中の修士論文について、内容を簡単にまとめ発表する。また、現段階で考えている結論についても発表する

### 修士論文概要

- 第１章　博物館とは何か
  博物館についての簡単な説明と、博物館で障害者支援を行わなければならない理由を述べる。その後、博物館全体の障害者支援の現状について、日本博物館協会の総合調査報告書を基に考察する。
- 第２章　博物館での事例
  実際に博物館で行われていた事例を紹介する。特色を持ったワークショップや取り組みを行っているところを中心に紹介する。
- 第３章　社会的包摂とユニバーサル・ミュージアム
  社会的包摂についての解説を行う。そのあと、バリアフリーとユニバーサル・デザインについて、違いや具体例を述べる。そして、博物館にユニバーサル・デザインの考えを取り入れたユニバーサル・ミュージアムという考え方について紹介する。
- 第４章　障害学の視点
  障害に関する学問である障害学について解説を行い、社会モデルという考え方を博物館における障害者支援に取り入れることについて考察を行う。
- 第５章　博物館からの視点
  博物館が抱える問題点から、博物館の限界点を考え、それの改善方法について考察する。
- 第６章　どのような障害者支援が効果的か
  今までに上げた障害学や、ユニバーサル・ミュージアム、博物館の限界点を踏まえながら理想的な博物館の障害者支援と、現実的な博物館の障害者支援について考察する。

# 古代エジプトにおけるアイラインの長さと宗教儀礼について
## ―古王国時代から中王国時代まで―

（キーワード：古代エジプト、アイライン、ピラミッド・テキスト、セド祭）

**小能 治子**
（東海大学大学院文学研究科文明研究専攻博士課程前期）

古代エジプトの図像では目元から長く伸びるアイラインが特徴的である。アイラインについては成分や容器等の研究はあるが、その長さの理由や表現方法の開始時期についての先行研究はない。そこで本研究では、アイラインを長く描く理由とその表現の開始時期を明らかにし、アイラインの長さと当時の社会・文化との関係を解明することを目的とする。

アイラインの使用目的は衛生上の理由と呪術・宗教的、社会的機能が考えられるが、この中でも宗教との関連について検討した。古王国時代から中王国時代について図像表現を王及び王族(ロイヤル)と庶民ではない有力者たち(ノン・ロイヤル)に分けて調査した結果、長いアイラインは、王及び王族については逓減していき有力者たちについては急増したことが分かった。古王国時代末期から中王国時代に入るまでの間は王権の弱体化により国内の統一が失われ(第 1 中間期)、有力者たちにより各地が支配された。これにより中央の文化や習慣が地方へと普及し、王族のみに許されていた表現方法が有力者たちへと拡大した。その結果「長いアイライン」表現が増加し、前述の調査結果となったと考えられる。

それでは、独特の長いアイラインは何を象徴しているのか。最古の宗教文書のピラミッド・テキストには父であるオシリス神に対して、子であるホルス神と同化した死せる王がオシリス神に顔料を塗る、あるいは捧げる、と記した表現がある。このことから、アイラインを引くことは、冥界の支配者オシリス神に同化するために必要な要素の一つとされたと推察できる。

上記の推論に基づき、古代エジプトにおける最古の祭りの一つである王位更新祭(セド祭)の様子を描いた壁画の図像を検討した。ジェセル王がセド祭(王位更新祭)に臨む姿を現した図像にアイラインがあることを確認した。セド祭においては王が儀式の場面ごとに装束や装飾（王権の象徴物や化粧も含む）を変えていることが看守され、アイラインの長さも場面により異なる。セド祭の図像の検討結果、王が神性を身に着けるタイミングでアイラインが長く表現される可能性が考えられる。

これらから、アイラインを長く引くという行為は、神との関わりの中から生じ、表現されたと考えられる。その始まりは第 3 王朝ジェセル王より前に遡るものと推察される。

≪主要参考文献≫

Gohary, J., *Akhenaten's Sed-festival at Karnak*, Kegan Paul International, 1992, London.
Mercer, S. A. B., *The pyramid text: in translation and commentary*, vols. Ⅰ～Ⅳ, Longmans, Green and Co., 1952, New York.
von Bissing, F.W.F., Kees, H., *Das Re-Heiligtum des Königs Ne-Woser-Re(Rathüres) Band Ⅱ：Die Kleine Festdarstellung,* J.C.Hinrich's Bookstore, Leipzig, 1923. translated by Doherty, S., et.al., http://trueofvoice.com/wordpress/?page_id=46　Version 20171130, (2021.5.19 閲覧)

# モバイルミュージアム理論を用いた次世代の博物館経営論

宍倉 和弥
（東海大学大学院文学研究科文明研究専攻博士課程前期）

現在の博物館の経営状況は芳しいものではない。例えば、日本博物館協会の「日本の博物館総合調査報告書」によれば、博物館全体の 80%前後が資料の購入予算や展示を推し進めるための調査研究の予算が 0 円、或いは 100 万円以下のごく少額である。さらに、支出総額も減少傾向にあることから博物館は経営的に非常に厳しい状況にあることがわかる。

一方、短期間に大多数の入館者を取り込むことに成功していたメディア共催型の大規模な展示であるブロックバスター型企画展は、新型コロナウィルスによる社会情勢の変化によって実施することがより困難になっている。

修士論文に向けての研究では、上述の問題を解決するため、博物館の定義とその役割を改めて理解し、現在の経営状況を再認識することで博物館の経営状況とその問題を確認する。そして、それらの問題を解決するための手法として、新しい展示手法・経営手法として東京大学の西野嘉章が考案した「モバイルミュージアム」の可能性を検討する。「モバイルミュージアム」とは当時まだ十分な機能を備えた博物館を持っていなかったアフリカの人々に対して複数の資料とキュレーターを大型トレーラーに乗せることで展示を行ったミュゼオ・バスを発端として生まれた理論である。その「モバイルミュージアム」理論を読み解くと同時に、その理論に類似した国内外の事例を用い、博物館が所蔵している資料を複数の小規模な企画展示に分けることによって展示の更新を続けていく手段を模索する。そしてこの理論が博物館の経営の改善に資するものなのか、またこの手法による展示が現代社会における文化の発展に貢献するものなのかを分析する。